論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号

氏　　名　　桐山宗泰

論　文　題　目

Prognostic impact of lymph node metastasis in distal cholangiocarcinoma

（中下部胆管癌のリンパ節転移が予後に与える影響）

論文審査担当者　　名古屋大学教授

主　査　委　員　　後藤秀宣

名古屋大学教授

委　員　　小寺泰弘

名古屋大学教授

委　員　　中村茂弘

名古屋大学教授

指導教授　　柳野正人

論文審査の結果の要旨

今回、中下部胆管癌において、リンパ節転移個数、廓清リンパ節（TLNC）と転移リンパ節個数の比率（LNR）、転移リンパ節部位のいずれが予後の指標として最も重要であるのかを検討する目的で、多施設共同研究を行った。2001年1月から2010年12月までの10年間に名古屋大学腫瘍外科学教室関連の24施設で、根治的膵頭十二指腸切除術が施行された中下部胆管癌症例370例を対象とした。157例（42.4%）にリンパ節転移を認めた。リンパ節転移個数が3個以下の症例と比べ、4個以上の症例は有意に予後不良であった。LNRでは0.17未満と0.17以上で分類した際に、転移部位では、総肝動脈沿いリンパ節（#8）転移陽性例と転移陰性例の比較した際にそれぞれ予後に有意な差を認めた。多変量解析を行った結果、転移個数のみが独立した予後不良因子であった。以上より、中下部胆管癌において、リンパ節転移個数が予後に最も影響し、転移個数を4個で分類することが予後を最も反映することが判明した。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. #8リンパ節転移を認めた21例中、4個以上リンパ節転移を伴う症例の比率は71%であったが、#8リンパ節転移を伴わない136例ではその比率は16.2%のみであった。また、#8リンパ節転移を伴わない136例のリンパ節転移個数の中央値は2個であったが、#8リンパ節転移を認めた21例のリンパ節転移個数中央値は4個であった。それゆえ、#8リンパ節転移症例の予後が不良なのは、これらの症例のリンパ節転移個数が多いことが関連していると考えられた。

2. LNRはTLNCに相関する値であり、TLNCは、合併切除臓器や拡大リンパ節廓清、患者の生体反応等により変化する。LNRはTLNCに反比例し、TLNCが増加するのに伴い、LNRは著明に減少する。また、LNRが0.17未満の110例のリンパ節転移個数中央値は1個であるが、LNRが0.17以上の47例のリンパ節転移個数中央値は4個であった。高いLNR症例の予後が不良であることは、転移個数による影響が強いと考えられた。以上よりLNRは中下部胆管癌にとって臨床的意義は乏しいと考える。

3. TLNCは予後規定因子とはならなかったが、pN0でかつR0切除を行った症例のうち、TLNCが10個未満の症例は、10個以上の症例と比べ有意に予後不良であった。これはこのグループにいくつかのリンパ節転移陽性例が混じっていた可能性が考えられ、中下部胆管癌の進行度の正確な評価には最低10個以上の廓清リンパ節が必要である。

本研究により、中下部胆管癌のリンパ節分類は、リンパ節転移のないpN0、リンパ節転移個数が1個から3個のpN1、リンパ節転移個数が4個以上のpN2の3群に分類することが最も予後を反映することが示された。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙２

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第　　号	氏　名　　桐 山 宗 泰
試 験 担 当 者	主　査　後藤秀実　小寺泰弘　中村雅也 指導教授　柳野正人	

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

１．総肝動脈沿いリンパ節（#8）節転移例の解釈について

２．中下部胆管癌における廓清リンパ節と転移リンパ節個数の比率（LNR）について

３．廓清リンパ節（TLNC）が予後に与える影響について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腫瘍外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。